博物館と生涯学習

八木厚之

1．はじめに

私は、平成7年度から9年度まで、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターに勤務していた。そこでの、資料収集の機会を生かして、世界的にも有数の積雪地帯である北陸地方の博物館を訪問することによって、自然と人間の活動に関する様々な資料を手に入れることができた。さらに、その他の博物館を見学することにより、中学校教育とも関連し社会的にも重要な意義を持つ生涯学習を支える一手段として、博物館が重要な役割を果たすのではないか、と考えるようになった。

その博物館であるが、以前は学習面から見て「3K」といわれることが多かった。その「3K」とは、「暗い」、「こむずかしい」、「こぎたない(埃っぽい感じがする)」である。それは、展示資料を光線による損傷から保護するために、必要最小限まで光量を落としている照明、展示物の解説などで専門用語が使用されていること、また、人間の集中力は、13文字3行といわれているが、実際の解説はさらに長く書かれていること、土器などが埃っぽい感じがすることなどが理由である。現在、日本各地に、博物館、歴史資料館、美術館など様々な分野に関係する博物館が日本各地に設立されている。そこで、本論では歴史学、考古学、民族学、地理学を中心として資料展示を行っている博物館、資料館と生涯学習の関係について述べる。

2．博物館について

(1)様々な博物館

①京都文化博物館　1200年もの間生き続けてきた京都という都市の歴史を、そこに生活してきた人たちとそれに伴う都市の変化を示している。平安京以前の京都盆地の自然環境から、平安京の時代、鎌倉時代～江戸時代、そして明治時代へと分かりやすく、視聴覚に訴える機器を使用し展示説明がされている。特に、平安京を中心として展示がなされていることが特徴である。

館蔵品の一つに東三条殿の非常に精密に作成された復元模型がある。現在、私の勤務す

る学校で使用している社会科歴史的分野の資料集に、この東三条殿の復元模型の写真が載っている。これは藤原兼家が造り、その後藤原氏累代の邸宅になったものである。この写真と平安京の地図により、生徒に藤原氏の権力の強さを理解させると共に、現存する物が一つもない寝殿造りについても詳しく教えることができる。

また、毎年、春と秋の観光シーズンを中心に多くの観光客が京都に来るが、その内の何％の人がこの博物館を訪れるだろうか。ここに来れば、京都盆地が三方を山に囲まれ南が開けている地形から、風水との関わり、ひいては道教との関係に気づく人もいるのではないであろうか。それにより、観光地巡りにより見聞を広めるだけでなく、さらに踏み込んだ学習ができ、新たな知識を得ることができるであろう。

②石川県立歴史博物館　縄文時代の展示では、大量のイルカの骨が出土した能都町真脇遺跡、そして、直径１ｍ近いクリの大木を縦半分に切り、高度な建築技術を用いて巨木を立てた掘立柱建物の巨大木柱根を検出した金沢市新保チカモリ遺跡の出土品を中心として展示されている。また、弥生時代のムラの様子をイラストで展示し、碧玉製の玉作りの作業工程を模型を使って展示してあった。

古墳時代の展示では、親王塚古墳、狐山古墳からの出土品を中心に古墳時代の社会の様子を示し、そのことから北陸地方が、中国・朝鮮などとの交流の窓口であったことや、我が国の古墳時代の文化には、大陸から伝わった技術・知識などが大きな役割を果たしていたことを示していた。

律令時代では、能登国、加賀国について紹介されていた。また、国家仏教を目指す律令国家が建立した能登国分寺を紹介し、そこから出土した和同開珎を展示していた。

中世では、須恵器の流れを汲む珠洲焼が紹介されていた。また、館蔵コレクションの展示室に「珠洲古陶」のコーナーがあった。この珠洲焼は、東京国立博物館でも展示のために１室使われていた。それほど資料価値の高いものである。中学校社会科歴史的分野の教科書にも、須恵器の高坏の写真と、それを焼成するための登り窯のイラストが掲載されている。これに関連させて、珠洲焼の重要性を中学校でも指導する必要を感じる。

その他、小・中学校の社会科歴史的分野の学習の一つとして利用できるように「歴史体験コーナー」が設置されていた。一般見学者もそのコーナーを見学できるが、児童・生徒は、それぞれの時代ごとに博物館の方で用意されたテーマの計画に沿って体験できるようになっている。例えば、縄文・弥生時代の火おこし実験をしたり、飛鳥時代に着ていたであろうと考えられる衣服を着ることができ、普段の学校における授業では体験できないことを体験できる。近年学校教育でも重要な位置を占める体験学習が、以前から取り入れられていて時代を先取りしていたようである。

③富山民俗民芸村　富山市の西方の呉羽丘陵の麓に造られた施設である。民俗資料、考古資料等が展示されている。しかし、一つの建物ではなく、民俗資料館・売薬資料館・牛人記念美術館・民芸合掌館・陶芸館・考古資料館・民芸館の７棟に分けられている。歴史的・民俗的に資料的価値の高いかつて実際に人が居住してきた合掌造りの家屋等が、内部もほとんど変えることなく資料館として使用されている。民俗民芸村の全ての施設をまとめて、一つの博物館・資料館として機能していると考えられる。

考古資料館では、決して広いとはいえない展示面積を有効に使えるように工夫されていた。先土器時代では、境野新遺跡から出土した石器が展示され、これらの石器は、東北系・瀬戸内系両方の影響を受けていたことがわかるように説明されていた。縄文時代では、縄文時代後期の古沢遺跡・杉谷遺跡・北代遺跡などから出土した縄文土器、石剣等が展示され、弥生時代では、豊田遺跡・野田遺跡・針原遺跡から出土した弥生土器・石包丁などが展示されていた。また、紀元前１世紀頃、北陸地方に稲作技術と金属器が伝播したことが説明されていた。

次の古墳時代では、４世紀初めに富山県の杉谷遺跡に、出雲文化圏にしか見られない四隅突出型墳丘墓が造られ、北陸と山陰の関係があったことが紹介されていた。また、５世紀に古沢塚山古墳のような首長級の古墳が築かれたことが説明されていた。そして、この古墳の模型とそこからの出土品が展示されていた。

平成８年３月と平成10年３月の２度訪れたが、その間に展示替えが行われており、訪れる人に新しい資料を見せられるような努力がなされていることを感じた。それに加えて、日本海文化についても力を入れて研究がなされているようで、他の日本海文化圏の地域である石川県、島根県地域との緊密な交流が行われてたことをうかがわせる展示であった。

また、民俗資料館では、農具などを中心として展示されているが、ケースに入っているわけではなく、雑然と置かれていることに驚いた。しかし、ケースに入れられていないので、間近に見られるという利点がある。

合掌民芸館では、合掌造りの家屋が竪穴式住居から発達したものであり、北陸という世界的にも珍しい積雪地帯に適した造りであることが、図面パネルを使いとてもわかりやすく解説されていた。この展示から、縄文・弥生時代の竪穴式住居も寒さを防ぐのに都合の良い造りで、厳寒の北西季節風をしのぎ、また驚異的な積雪に対する耐久性をも兼ね備えていたことが考えられるであろう。また、世界遺産にも指定された岐阜県白川村・富山県五箇山の合掌造りの建物群に対する見方・考え方も変わってくるであろう。

④高岡市万葉歴史館　富山県高岡市に設立された万葉集と奈良時代を研究するための新しいタイプの博物館である。越中国守を勤め万葉集の中心編者であり、越中国守として５

年余り在任した大伴家持に焦点を当てた展示内容となっている。家持の国守在任中に、家持や仲間の官人達に310首が詠まれた。その歴史的事実もあり、貴族の雅やかな雰囲気が館内全体に漂っている。

常設展示では、家持の大宰府での少年時代、越中での国守時代、帰京後の権力闘争、因幡国での国守時代という流れで、奈良時代をいつもと違う方向から見つめられるようになっていた。これを「家持劇場」として、コンピュータで家持の人形を動かし、それに合わせた照明・音響効果を用いて、家持が詠んだ和歌とその題材である高岡の風土を、鑑賞できるようにされている。この歴史館全体を通して最新の視聴覚機器を多用し、小学生からお年寄りまで、万葉集という難しい資料を身近に感じられ興味をもって学習できるように工夫されていた。また、この歴史館は、展示機能、教育普及機能、調査・研究・情報収集機能、観光・娯楽機能を持ち合わせ、滋賀県立琵琶湖博物館とよく似ており、観光スポットとしても、また学校教育の一環としても利用できる施設である。

企画展示では、万葉の風土と歌人をテーマに飛鳥・藤原の都と大宮人、吉野と宮廷歌人たち、大宰府と旅人・憶良、など万葉集に出てくる6地域の風土と時代環境を、パネルで展示していた。その他、漏刻、隼人の盾、紺瑠璃杯、越中国関係の木簡などが展示されていた。漏刻は、以前、中学校社会科の授業で使用していた資料の「平城京の1日」に言葉だけ出ていた。この歴史館では、その模型とそれに合わせて作成された実験模型を作動させることにより、サイホンの法則を利用した、高度な科学的計算によって作成されたものであったことがわかる。

少し気になったことは、この歴史館は家持の美しい部分、悲哀に満ちた部分を中心に光を当てていることである。家持が長岡京造営司藤原種継暗殺の首謀者であったとする説もある、という説明は皆無であった。しかし、この歴史館の設立意義を考えれば、その部分を出さないのは当然であるし、また、大伴家持あるいは奈良時代に興味を持った人は、さらに自分で調べてそのことなどを知ればよいわけで、その自分で調べるという行為自体が、生涯学習の一つになるであろう。

⑤琵琶湖博物館　琵琶湖をテーマにした新しいタイプの「体験型」の博物館である。平成8年10月20日の開館当初の入場者数は、1年間に50万人の予想であったが、実際には100万人を越えていた。生涯学習の重要性を最初から考えていた様であり、小学生から老人までが楽しく学ぶことができる様になっている。地学的・考古学的・生物学的・地理学的・民俗学的に広い視野から琵琶湖とその周辺の人間の生活について学ぶことができる。

地学を中心としたコーナーでは、ナウマン象の化石の標本が中心に据えられている。その他にも様々な化石の標本が展示されている。また、生物学の研究室の様子も展示されて

おり、このような場所で魚類の研究などが、顕微鏡などを使い行われていることがわかる。

人々の生活のコーナーでは、琵琶湖を中心とした人々の生活に焦点が当てられている。特に興味を持ったものは、築後100年の民家を用いて、内部は昭和30年代の状態に復元し展示されている[注1]。入場者の中にはその民家のトイレを本当に使ってしまった人もいた、というくらい違和感のないものであった。ふつう見学者が見ない裏側の部分もしっかりと復元されており、学芸員の展示に対する気概を感じた。また、琵琶湖を中心とした淀川水系の空中写真を焼き付けた陶板を、床一面に貼り付けたコーナーもあり、見学者のほとんどは自分の居住地を探し始める。その作業を助けるために、大型のルーペも用意されていた。

魚類展示のコーナーでは、琵琶湖に生息する魚介類が飼育展示されており、淡水魚のみの水族館としては日本最大級である。琵琶湖の環境を再現した大型水槽には、アクリル製の透明なトンネル部があり、水底から遊泳している魚類を見上げられるようになっている。また、様々な魚類を、それぞれの種に応じた生息環境を再現した水槽で飼育されていた。

また、特殊な装置を用いることにより、水槽の前面に開けられた穴から手を水槽の中に入れ、泳いでいる魚に触れることができる。他のコーナーでもコンピュータを操作して調べられるようにしてあり、それにより知識・感動等を得られるだろう。

また、ミュージアムショップの様子も、観光地のようにあらゆる年代の人の需要にも対応できるように、様々なおみやげをそろえている。これからの博物館は、この様に、ミュージアムショップを充実させる必要があるのではないであろうか。

⑥ハピエル城博物館　伊勢志摩スペイン村は、スペインに焦点を当てたテーマパークであるが、その中に設立された博物館である。内部の展示は、旧石器時代～現在まで縮小模型を多用した展示がされていた。しかし、その中でもホモ・サピエンスが、描いたとされるアルタミラ洞窟の壁画の岩から絵まで精緻に復元した模型が、実物と同様に天井に設置され展示されていた。見学者は、真上を向いて見ることになり、無理な姿勢を強いられそうであるが、壁画の直下にはソファーが置かれていて、見学者はそれに座って見ることにより、楽に長時間見学することができる。

その他、紀元前4000年代の農耕が始まった時代のシエンポスエロス式鐘型土器、紀元前8世紀の地中海文明の時代のエルチェの婦人像、ローマ帝国時代の水道橋の復元模型等を時代順に展示されていた。

旧来の展示方法をとっているが、入館料が不要であること、スペイン村全体でスペインの雰囲気を楽しめること、今や博物館は入りにくい所ではなくなったこと等の要因により多くの人が見学に訪れていた。

第１図　冷泉邸

(2)特別展について

①「冷泉家の至宝展」

冷泉家は、藤原俊成・定家の流れを汲む家であり、現在も京都市上京区烏丸通今出川通東入る北側に位置している。寛政２年に再建されたが、現在も元の位置に立ち続けている唯一の公家住宅であり重要文化財に指定されている。明治維新に明治天皇が東京に行幸したときに、朝廷の文化を守るように命じられ、それに従い朝廷における年中行事等の公家文化を守り続けてきた。この至宝展では、藤原俊成や藤原定家の古典籍、数々の屏風・掛け物等に描かれた絵画、女性服飾類等が多数展示されていた。

また、この展示の見学者の様子であるが、女性の見学者が殆どで、男性の見学者はほんの僅かであった。この状況は、女性が貴族社会へのあこがれを持ち、また現在の日本の社会に残る貴族社会である皇室に興味を持つ女性が多く、また宮中・貴族文化・貴族の生活への憧れがあるのではないであろうか。この至宝展を見学すれば、平安時代の貴族社会・文化・生活などについてかなり詳しく知ることができる。

②「越前朝倉氏・一乗谷展」　室町時代後期の戦国時代の期間である。朝倉氏は、教科書の群雄割拠の地図に掲載されている。分国法の例として朝倉敏景17か条を紹介し、戦国大名についての説明で、下剋上の一例として守護代から戦国大名となったこと、本能寺の変で織田信長を滅ぼした明智光秀が、一時身を寄せた大名として紹介する。

しかし、ここで大切なのは朝倉氏の遺跡が存在する一乗谷は、中世の社会そのままであるということである。この展示により、多くの見学者は実際に福井県の一乗谷に行かなくても、この特別展が開催された京都文化博物館で、朝倉氏の拠点の様子について一定の知識を得ることが可能である。[注2]

一乗谷の地形は、戦いの時には堅牢な山城を司令部・基地として機能させ兵を動かし敵を撃退する。平時には、一乗谷全体がある程度は活気のある町として、そこに居住する者たちの生活の舞台となったであろう。戦国時代の群雄割拠が、永遠に続くならばそれで良かったかもしれない。しかし、中世の事物・権威を悉く嫌った信長に、朝倉氏が滅ぼされた原因もこの特別展を見学することによって理解できるようになるのではないであろうか。

3．学ぶことの楽しさ

私は中学校の社会科の教師をしているが、知り合いや友人から「なぜ、歴史を勉強しないけないのか」、「歴史は覚えるだけやし面白くない」、「テストや入試のための勉強やろ」ということをよく言われる。確かに中学校・高等学校の勉強に関しては、そのような部分も大きいであろう。覚えなければ、良い成績がとれない。覚えれば良い成績がとれるという葛藤場面に自らが置かれ、価値判断を迫られる。したがってストレスが溜まり、歴史の学習が面白くなくなる。自分が興味を持ったことに対して、自分で調べ疑問を解き、或いは自分の立てた仮説を証明することにより知的好奇心が充足されると学習がおもしろくなるであろう。

新学習指導要領が、平成14年度には完全実施される。それにより、以前にもまして生涯学習と中学校教育の社会科の関連が重視される様に考えられる。学校では、生徒が社会に出て人生を歩んでいく上で必要と考えられる知識を教えるだけでなく、体験的な学習を中学校教育に多く取り入れる必要も考えられる。私が現在勤務する宇治市立木幡中学校では、１年生の校外学習で国立民族学博物館の見学を取り入れている。そこでは、班行動を取り入れて問題解決学習を行う。教師が準備した問題を、展示物を見学し調べることでその答を発見するという手法である。生徒は楽しみながら、世界の諸民族の生活・文化等についての知識を得たり、自分なりに興味を持つ部分もでてくるであろう。

しかし、重要なのは、その後の生徒の行動である。そこから、発展するためには、テレビ・新聞報道、教育的テレビ番組との関わりも重要になるであろう。例えば、縄文時代の歴史観を大きく変える可能性を秘めた三内丸山遺跡のことを、生徒はマスメディアを通じて知る。そこには、直径約１ｍと考えられる栗の巨木を柱として用いた大型の掘立柱建物が建てられていたことを知る。その建物の柱の立て方には、「内転び」という建築技法が使われているようである。それと同様の技術が使われたと考えられる掘立柱建物を、国立民族学博物館の東南アジアのコーナーで見ることにより、その共通性に気づき広い視野を持つことができるようになるであろう。また、弥生時代に使用されたと考えられる扁平片刃石斧とほぼ同じものが、オセアニアコーナーの島に住んでいる人々の道具の中に見られる。ここでは、扁平片刃石斧だけではなく、その石器を木の棒に紐でくくりつけられた状態で展示されている。見学者はそれを見ることにより、手斧としてオセアニアでは使用されていたことを理解し、次に弥生時代の人間もそのように使用していたであろうということを考えるであろう。したがってこれからの社会科教師は、必要な知識を生徒に教えるだけでなく、生涯学習の素地づくり、すなわち自分が抱いた疑問を自らが、調べることによりその疑問を明らかにし、更に自分の世界を広げていく力をつけなければならない。

中学校社会科で学習する戦国時代についても、博物館を見学することで見識を深めることができる。先に述べた「越前朝倉氏・一乗谷展」を見学することにより、朝倉氏についての知識を得ることができる。また、朝倉氏を滅ぼした織田信長については、滋賀県立安土城考古博物館を見学すれば、安土城や中世の城郭について多くを学べる。これにより、中世にしがみつき滅んでいった戦国大名と、天下をとった織田信長の相違点を理解でき、その後の歴史の流れとの関連も理解できるであろう。

その他、木幡中学校では、平成10年度に３年生の選択社会科の授業で、宇治市教育委員会が調査中の遺跡を訪問し、木幡神社遺跡の発掘調査の手伝いをさせていただいた。生徒達は、包含層から出土する土器を手にして興奮し、また、いにしえの人々の生活に思いを馳せたことであろう。平成11年度の１年生の職場訪問の取り組みで、１つの班が寺界道遺跡の発掘調査に参加させてもらった。(注3) 同じく平成11年度に、郷土愛のテーマで(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの奥村清一郎氏に来校していただき、黄金塚古墳群、二子塚古墳、二子山古墳を中心とした木幡地域の歴史の講演を、１・２年生を対象にしていただいた。生徒は、木幡という地名の由来から、古墳時代までの知識を得ることにより地域に対する愛情も深めたようであった。それを受けて、障害児学級の社会科の授業で二子塚古墳を見学し、次いで二子山古墳まで行く予定であったが、現地の状況が厳しく、付近から眺めるにとどまったが、古墳を造るために使役された人々の苦労などに気づいたことであろう。

大切なことは、上記のように自分が手に入れた知識を更に深めることであり、それが生涯学習に発展していくと考えられる。先述の奥村清一郎氏の講演の中で、氏が生徒に話された「疑問があったり、本当かなと思ったりすれば自分で行って見て下さい」と述べられたことが、学校という場においては新鮮で印象的であった。学校で教わることについて本当のことを教わっているのかな、と不信な状態で授業に臨むと学習したことが頭に入らないであろう。しかし、実際は物事について疑問を持つことは、当然なことであるし、またそれを検証するために自分で調べるということ自体が、生涯学習に発展するのである。そして、自分が疑問に思ったことを調べる手段が書籍類であったり、最近の社会の流れから考えてインターネットであろう。さらに自分が興味を持ったことについてより深く知ろうと思えば、博物館に行けばよいのである。そこには、実際に手に持ってみるということはできないが解説を付けて展示されているし、何よりも実物を見ることができるのである。
生涯学習を進めるためには、広い視野を持ち時代・社会・国家を超え、自分が興味・関心を持てるものを発見することが、第１の重要な要素である。そして、次に重要になるのが、自分で調べる力である。この力は、平成14年度から完全実施される「学習指導要領」の社

会科編でも特に重要な意味を持つものであると考えられている。学校生活の授業だけでは、生徒が身につけられる知識量も限られたものになるであろう。したがって、自分で新しい知識を吸収することが、人生をよりよい豊かなものにしていくであろう。

4．まとめ

生涯学習という言葉が、社会全般に取り入れられた今日、様々な教育関連公共施設で生涯学習に向けた催しや行事が行われ、また、その実現のための会議・準備がおこなわれている。本論でも博物館と生涯学習の関連について述べてきたが、ここで改めて述べるまでもなくその関連は重要である。近年、地方の博物館や郷土資料館にも旅行や帰省の際に家族で見学している光景をしばしば見ることができる。博物館の側でも、見学者を増やすための努力が見られる。第1は、視聴覚に訴える機材を使い、若者にも見やすい環境を作り上げている。展示物の解説表示板を読む必要が少なくなったことで「こむずかしい」という印象を、一部分でも払拭できたのではないであろうか。第2は、ミュージアムショップの充実である。東京国立博物館では、一つの建物の地下1階部分の大部分をミュージアムショップが占めている。そこでは、これまでに開催された特別展等の図録をはじめ、館収蔵物の絵はがき、埴輪などの模型、手鏡、キーホルダーなどが、販売されている。また、琵琶湖博物館のミュージアムショップでも、この博物館の展示図録、特別展の図録、キーホルダー、琵琶湖の特産品、鉱物のサンプルなどが並べられ明るいムードが漂っている。入館者の多くは、ここで自分の来館記念の品、あるいは、家族・知人へのおみやげを買って帰るようである。第3は、新しいタイプの博物館で観られることであるが、館内全体が明るいムードになっている。これにより、「暗い」、「こむずかしい」、「こぎたない」の博物館の3Kをすべて払拭できる。その結果、多くの人を博物館に集める素地ができ、知的好奇心を満たすため等に、様々な知識などを手に入れようとする人々が来館するであろう。

また、京都府は京都文化博物館以外に、古代から現在までの資料を展示する博物館を設立する必要があるのではないだろうか。京都文化博物館は、平安時代を中心とする京都についての常設展示を行っている。しかし、考古資料の展示は、せまい面積の展示室の中で空間を垂直方向に使い石器などが展示されているのみである。京都府全域に渡り遺跡の発掘調査を大規模に行っているのは、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターだけであり、その成果として現在までに貴重な遺構・遺物が土中より発見されている。これらの文化財は国民共有の財産であり、収蔵庫の中に眠らせておくのではなく、広く社会に見せる必要がある。滋賀県の例を挙げるならば、滋賀県埋蔵文化財センターでは、出土遺物を常設展示している。このように(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターも、常設の展示を行うため

の博物館を設立させ生涯学習を支える組織となる必要を強く感じる。

（やぎ・あつゆき＝宇治市立木幡中学校教諭）

注１　琵琶湖博物館の学芸員の方に御教示いただいた、記して感謝したい。

注２　京都文化博物館学芸員土橋　誠氏に御教示いただいた。記して感謝したい。

注３　宇治市教育委員会主事荒川　史氏に御教示いただいた。記して感謝したい。

参考文献

朧谷　寿『藤原氏千年』(講談社現代親書　講談社)　1996

山口　博『王朝貴族物語』(講談社現代親書　講談社)　1994

保谷　道久『平安王朝』(岩波新書　岩波書店)　1996

田邊　裕・吉田　孝・阪上順夫ほか『新編　新しい社会歴史』(東京書籍)　1999

浜島書店編集部『資料カラー歴史』(浜島書店)　1997

都出比呂志『王陵の考古学』(岩波新書　岩波書店)　2000